研究室めぐり　愛知大学華日辞典編さん所

三十七年には大辞典刊行　最新、完全な編集目指す

○…愛知大学の前身、上海の東亜同文書院大学が、昭和五年以来終戦まで進めてきた華日辞典編集の計画を受け継いで〝最新にして完全〟な華日大辞典の完成を目指すのがこの編さん所。

同大学では、この辞典編集事業創始者の一人、鈴木択郎教授と、新たに迎えられた元同文書院大学予科教授、内山正夫氏、台湾から迎えた婦人講師張禄沢さんの三人が中心になり、各学部教授スタッフを協力メンバーにして、三十年三月から編さん所を開設、本格的な編集を再開した。

○…中国古典から、最新の雑誌まで利用できる完全な辞典――これが華日大辞典編集の目標だが、最初の一年間は送られて来た基本カードの整理。この作業が終ってやっと基本カードの増補工作に移った。つまり、戦後に作られた新語、新用例を、あらゆる資料から見つけ出して、新しい時代に即応する辞典の基礎を作る、根幹的な仕事だ。

○…それにはまず戦後に国内外で刊行された辞典との対照、補充をする（イ）の工作が必要だ。このためには新中国で発行された「同音字典」「学文化辞典」「新華字典」など、多くの辞典との比較、対照が行われる。同時に変動を続ける新中国に生れる無数の政治、経済用語、それに新聞用語などを記録する（ロ）の工作も並行して行われる、

「中華人民共和国憲法」「毛沢東選集」「人民日報」「学習」などがこの資料になる。こうした仕事のためには、学内各学部教授の緊密な協力が必要だが、老舎の翻訳で知られる教養部桑島信一教授や法経学部池上貞一、川崎一郎講師らの努力で、現在までに（イ）の工作が三分の一近く進み（ロ）の工作も順調に滑り出した。

○…同編さん所の計画では（イ）（ロ）の工作は三十五年に終り、三十六年に全カードを整理して、三十七年には大辞典刊行の予定だが、それに先立ち「中国現代語辞典」（仮称）出版の計画が去る四月から進められている。これは中国と関係のある実務字や、研究者の必要に応じて作られるもので、大辞典にはそのまま資料として活用出来るもの。出版の見通しがつき次第、直ちに編集に移る予定だ。

〔注〕朝日新聞　昭和三二年七月二六日所載。

大詰め近い『華日辞典』の編集 ―愛知大学―

十数万語を収録　資金に悩む　出版は遅れそう

愛知大学では「華日辞典」づくりを続けてきた豊橋市町畑町、同大学内華日辞典編さん（纂）処＝主任・鈴木択郎教授＝を、作業も大体終わる見通しがついたので、今年度末で閉処する。昭和三十年四月から六年計画だったが、途中、中国の文字改革などあって一年延びた。同辞典はわが国では初めての十数万語を集録する。しかし閉処しても、出版するには、まだ整理事項が相当残り、また一千万円の資金がいるため、二年後になるようだ。

同辞典はアルファベット順に「A」から作り始め、いま「X」の部まで進んでいる。一語ずつのカードが約三百箱にぎっしり詰まり、既出版の華日辞典には例を見ない一語一語の語源、語のニュアンス、用語例、方言、略語、反対・同意・参照語などが書き込まれている。〝今年度末までに五十箱作らねばならないから大忙しです〟と鈴木教授はいっている。

戦前、上海にあった東亜同文書院大学が華日辞典の作成に着手、カード十四万枚を作ったが、戦後中国政府に接収された。それが政府要人、郭沫若氏らの好意で、日中友好協会を通じて日本政府に返され、愛知大学で完成することになった。国庫補助百二十万円、大学予算二百万円、民間会社などの援助など計五百万円をもとに鈴木教授、内山雅夫助教授、張禄沢講師ら九人で始められた。

十四万枚カードがあるといっても仕事は思いどおり進まなかった。中国が昭和三十一年から三十三年にかけて、略字化と表音文字（ローマ字）化をし、表音文字などは計三回変わったりしたので、そのつど書き直しするはめになった。それに専任処員がおらず、各処員とも講義を持ち、合い間合い間の仕事だったので、進行がにぶらざるをえなかった。九人で出発したが、いまは処員七人。うち初めから続けているのは三人だけだから仕事の打ち合わせ事項も統一しにくい点もあった。しかし処員たちは〝閉処になっても、あとは現処員がコツコツ整理していけば完成できるまでにしておきたい〟と苦心をのべている。

なお出版については特殊な辞典なので単価が高くつき、大ざっぱに見積もっても十三万語として週刊誌大二千ページで三千部刷り約一千万円かかる。小幡清金同大学学長代理は〝仕事が今年度末で終わる見通しなので閉処する。出版は二年後くらいになろうが、大学としてもいままでに一千万円ほどつぎ込んできたし、早く実現させたい〟といっている。

〔注〕中部日本新聞　昭和三七年九月八日所載。

できた、世界最大の華日辞典

豊橋市町畑町、愛知大学の華日辞典編纂所（鈴木択郎所長）では、来年春、十五万語のことばを収めた世界最大の華日辞典を完成する。また全国各大学の外国語科で使われている中国語教科書の来年度版の改定も進められ注目をあびている。

なんと15万語も

愛大　32年ぶりに実結ぶ

華日辞典は同編纂所がさる三十年四月開設されてから九年ぶりに完成するわけだが、この仕事に着手したのは鈴木択郎教授が上海の旧東亜同文書院にいた昭和六年のことなので、実に三十二年ぶりになる。

編集には所長の鈴木教授はじめ同大学の中国語担当その他関係学科教授、助教授、講師など。このなかには中国人女性の欧陽張禄沢講師（四一）もいる。

この仕事は日本にすぐれた華日辞典がないため困難をきわめたが現在ようやく「Z」の項の整理を進めている。

この新辞典は収録したことばの数が十五万語で、現在出版されている辞典で一番多い七万語のものの二倍以上。また現行の辞典に比較して①例文が多い②内容が非常に新しい③現行辞典には間違いがみられるが新辞典では発音、意味その他正確であることなどが特徴となっており、完成すれば世界的にも注目をあつめるとみられている。

一方、同大学の中国語教科書「華語萃編」は毎年学内の学生に使わせるため作製してきたが、全国各大学で使用しているどの教科書よりも内容がすぐれていることがしだいに認識され、昨年は五百部印刷したのに不足した。広告もしないのに他の大学からの注文が多く、愛大の学生でこの教科書を買えなかったものもいるほど。

そこで来年は三千部を発行するため、華日辞典編纂所で改訂をはじめた。とくに発音に力を入れ、同編纂所の内山雅夫助教授（四六）は映画の録音テープをききながら改訂を進めている。教科書の名も今年度のものから「中文会話教科書」と改めており、古い言葉をはぶき、新しいものにきりかえて完ぺキを期している。また今年度用のものはまだタイプ印刷だったが、来年度用のものは東京の出版社から活字印刷で刊行する

〔注〕名古屋タイムズ　昭和三八年八月二十日所載。

完成間近い愛大の「華日辞典」

十三万語を詳細に収録　九年がかりの労苦が実る

豊橋市町畑町、愛知大学華日辞典編さん（纂）処＝主任・鈴木択郎教授＝で作成中の〝華日辞典〟がいよいよ今春、完成する。昭和三十年四月から六年計画で始まったが、途中、中国の文字改革などあって九年の歳月を要した。十三万語を収録し、わが国初めての本格的辞典といわれるが、使用者が限られるため、出版の引き受け手はまだなく、出版はおくれるようだ。しかし完成は間近い。同処員たちは「久しぶりに味わう正月気分だ」と胸をなでおろす半面、仕上げになお精根を傾けると学者のきびしさを見せている。

辞典はアルファベット順に〝A〟から着手され、昨年末〝Z〟まで進んだ。一語ずつのカードが四百ほどの整理箱にぎっしり詰まり、これまで出版された華日辞典にはないていねいさで、一語ずつ語源、語のニュアンス、用語例、方言、略語、反対、同意語から参照語まで記されている。収録後はいまの中国語の基本になる近代文学のことば以後だから約七百年前の元時代以降で、中共政権の文字改革による変化後まで加えてある。鈴木教授は「作成時期が、ちょうど昭和三十一年から三十三年にあった文字改革に出っくわしたため苦労した」といっている。

文字改革は、略字化と表音文字（ローマ）化をしたわけだが、表音文字などは三回も変わるなど繁雑な中国語に対する中共の苦悩が、そのつど処員らの悩みとなり仕事をふやした。

この辞典編さんは昭和三十年に始まったが、もとをただせば、それにより二十数年前の同六年にさかのぼる。鈴木教授が上海の東亜同文書院教授だったころ同僚と辞典づくりを手がけたのが始まり。カード十四万枚ができたところで終戦となり、中共側に全部接収された。それが中共の郭沫若科学院院長らの好意で日中友好協会を通じて日本人民に贈られ、中国語に強い愛知大学で完成することになった。国庫補助百二十万円、大学予算二百万円、一般会社の援助など計五百万円をもとに鈴木教授、内山雅夫助教授、張禄沢講師ら九人で出発した。

「贈られたカードは、その後の中国語の改革で全然役に立たなかった」と鈴木教授がいうとおり新規着手と同じだった。専任処員はわずか三人で、そのほかの処員は講義の合い間に仕事をした。途中、転任の先生もあったりして、いまは処員も五人に減った。初めから続けているのは鈴木教授とほか二人だけ。華日辞典とひと口にいっても中国にさえ辞典の決定版がまだ作られていない現状だから、ふつうの辞典づくりのように欧米の参考文献などあろうはずもない。古い辞典の誤りもずいぶん直したといわれる。

なお出版は特殊辞典なので単価が高くつき、大ざっぱに見積もっても十三万語として週刊誌大二千余ページ、五千部刷り三千万円近くかかる。初めから完成を暖かく見守っている本間喜一前学長が目下、出版先など探している。

鈴木教授の話　やっとここまでこぎつけてホッとした。しかし整理といってもこれがまたたいへんだ。処員とも力を合わせてがんばりたい。長い間かかったがいろいろな人の激励や支援があったから、ここまでたどれた、それに報いるためにも世の批判を耐えうるような辞典にしたい。

〔注〕中部日本新聞　昭和三九年一月五日所載。